３つの目で見た郷土香川《第１１回》

～丸亀城紀行～

今回の旅は、国の史跡丸亀城。県道 33 号線から道路標識に導かれて丸亀市役所へ進むと、市民広場の先に丸亀城の内堀が現れます。幾重にも重なる高さ日本一 60 メートルの石垣を見上げると国内に現存する 12 の木造天守の一つで日本最小の天守閣が目に入ってきます。内堀に架けられた石橋を渡り、大手二の門をくぐると、大手一の門（右上の写真）が訪れる人を迎えてくれます。さらに足を進めると、傾斜が急で、時々立ち止まって振り返りたくなることから、いつしかそう呼ばれるようになった「見返り坂」に至ります。坂の登り口には案内所があり、伝統工芸品「丸亀うちわ」の製作実演を見ることができます。ここでパンフレットをもらっていざ登城。右手に高浜虚子の『稲むしろあり　飯の山あり　昔今』の句碑を見て三の丸へ。

三の丸は約 50.5 平方メートルの平地で虚子の句にある飯野山（讃岐富士 421.9 メートル）を望む東方の眺め（右中の写真）がすばらしい。三の丸の東南には月見櫓の礎石がありその西側の櫓跡あたりには「延寿閣別館」（右下の写真）が移築されています。これは、麻布にあった旧藩主京極家の江戸屋敷の一部を移築したもので、内部は藩政時代の大名の生活がしのばれるように昔のまま保存されております。

東側の虎口から登ると二の丸。ここの見所は春の桜と二の丸井戸（左下の写真）です。深さ 65.4 メートルは日本一深いといわれており、石垣を築いた羽坂重三郎が簡単に石垣を登るのを見た殿様が、敵に通じるのを危惧して井戸の底調査を命じ中に入ったところに石を投げ入れて殺したという言い伝えがあります。

いよいよ標高 66.3 メートルの本丸。暗色の石垣と鮮やかなコントラストを奏でる白亜の姿は、全国でも珍しい木造天守として知られています。小ぶりではあるが、三層三階高さ 15 メートルの天守閣はそれを感じさせないほどの風格と威厳を備えています。中は、一階、二階とも狭く、階段も急で

All Right Reserved. Copyright(c)2011 香川県社会保険労務士会

す（左上の写真）。天守には構造的に展望できる仕組みになく、戦時の機能が優先のようだが、城の北は、丸亀市街から瀬戸内海の風景まで眺められます（左下の写真）。往時は、海の見張りも兼ねていたのでしょうか。

【丸亀城の歴史】

丸亀城は、安土桃山時代の慶長 2 年(1597)に生駒親正が丸亀平野の亀山を中心に、その山すその平地に外堀と内堀を巡らせて築いた平山城であります。親正は、天正 15 年(1587)に讃岐一国を与えられ、播州赤穂から 17 万 3 千石の領主として入封し、高松城を築き、本城としていましたが、東讃岐を隠居領にあて、西讃岐を嫡男の一正に譲り、丸亀城を建て城主としました。城は慶長 2 年(1597)から築城に掛かり、同 7 年(1602)に完成。慶長 5 年(1600)に関ケ原の合戦が起こったが、父の親正は西軍の石田三成方、子の一正は東軍の徳川家康方と父子が東西に分かれ、戦後、勝者の一正は讃岐一国を与えられて高松城を居城とし、丸亀城には城番が置かれました。そして元和元年(1615)の一国一城令によって廃城と決定したが、領主正俊は、建物を破棄せずに樹木を植えて隠し、後日に備えました。生駒氏は 4 代高俊の時、家中騒動が起こり、除封となりました。

この後、肥前国天草郡豊岡城主から寛永 18 年(1641)に西讃岐に入封した山崎家治は翌年から丸亀城を再建することとし、山上の曲輪の縄張りを新たにし石垣が修築されました。そんな山崎氏も 3 代にして無嗣除封となり、万治元年(1658)播州(兵庫県)龍野から京極高和が 6 万石で転封し城の再建が継続されました。寛文 10 年(1670)には城の南にあった大手門を北に移し大手門櫓と西曲輪の御殿が新しく造営され、延宝元年（1673）32 年の歳月を要した大改修が完了。現存する石垣の大半はこの改修の際に完成したものであり、現存する天守はこのとき築造されたものです。しかし明治 2 年(1869)の大火で、天守と一・二の門以外は現存しなくなってしまいました。

【丸亀京極家】

京極家は、鎌倉時代から続く名門。5 代当主京極高氏（道誉／どうよ）（1296 ～ 1373）は、足利尊氏の室町幕府樹立の立役者であり、時の権威に反発し粋で華美な服装や振る舞いを好む美意識持った、「婆娑羅（ばさら）大名」と称される。17 代当主京極高次は、居城の大津城大津城に篭もって 1 万人を超える西軍の大軍勢を食い止め、関ヶ原の主戦場へと向かわせなかった。戦後、その功により若狭一国を与えられて国持大名となり、弟高知並んで京極氏の御家の再興を果たしました。ちなみに、高次の正室常高院は、浅井 3 姉妹の次女「初」です。高次の庶子忠高は出雲・隠岐 26 万石に加増転封されるが寛永 14 年（1637）に亡くなったとき嗣子がなかったため改易されかけたが、それまでの徳川家に対する京極家の忠義を考慮されて、甥に当たる高和が播磨龍野に 6 万石の所領を与えられることで大名として存続を許された。その後高和は万治元年(1658)讃岐丸亀 5 万石と播磨揖保郡網干 1 万石の計 6 万石に移封となり 7 代に亘り明治維新まで続きました。

《参考資料》　・新編丸亀市史 2　近世編（平成 6 年刊行）
・いにしえのときを刻む丸亀城　（丸亀市観光協会　平成 22 年増補改訂版）
・丸亀市ホームページ

All Right Reserved. Copyright(c)2011 香川県社会保険労務士会